



## ◆ 公開講演会・研究会報告 ◆

日本オリエント学会共催 公開講演会  
「古代近東の契約・誓約・条約」

日時：2009年10月17日（土） 14:00～16:00  
会場：同志社大学 至誠館2階 S21教室  
講師：渡辺 和子（東洋英和女学院大学 人間科学部 教授）



「約束をする」とはどういうことか。「約束を守らせる」とはどのような行為なのか。本講演はこの問いかけから始まった。法律的な「契約」、宗教的な「誓約」、そして国家間の「条約」と、我々はいろいろな場面で多様な「約束」（契約）を交わす。講師の渡辺和子先生はまず『広辞苑』や『岩波哲学・思想事典』の「契約」の項を引き、社会的（法律的）契約と宗教的契約が同じ「約束」でありながら、別の概念として整理されていることを確認した。しかし、両者はまったく重ならないのか。「契約」を含め、人間の各行為に関するさまざまな概念は、古代ギリシア以来の2500年間のヨーロッパ史に基づいて整理されてきた。しかし渡辺先生が専門とする古代メソポタミアに目を向ければ、人類の歴史は5000年間に拡大する。しかも近代的な概念の基本的な枠組みがほぼ出来上がった19世紀後半から、古代メソポタミアとその周辺（古代近東）の基本史料である粘土板文書の発掘と解読が本格化したこともあって、その知見は我々の社会的・宗教的な概念理解にほとんど反映されていない。すでに出版された粘土板文書だけで十数万点あり、その倍ほどが今も博物館で公開を待っており、さらに未発掘のものまで含めると、その全容と人類史理解へのインパクトは無限大となる。

本講演の中心テーマはアッシリア帝国で紀元前672年に公布された「エサルハドン誓約文書」である。この粘土板文書は1955年にアッシリアのニムルドで発見され、1958年に、アッシリア王エサルハドンと周辺諸国との支配・服従を約束する「エサルハドン宗主権条約」として出版された。それは紀元前13世紀頃のヒタイト帝国の「宗主権条約」と形式が似ていること、また聖書の契約形式や『申命記』の〈呪いの言葉〉との類似点があることが指摘された。そしてその類似は、アッシリアに服属したユダ王国もこの文書を受け取ったことに起因すると推測された。

しかし渡辺先生の研究によれば、この文書は「宗主権条約」ではない。実際にはエサルハドンの死後、皇太子アッシュルバニパルに王位を問題なく継承させるように、皇太子の兄弟、王族、高官、そして周辺諸国の支配者たちに誓わせるための「誓約文書」であった。この誓約を受けとるのは王ではなく神々であり、その代表としてアッシリアの最高神アッシュルが調印した形になっている。ここで誓約を第一に義務づけられたのは、王位継承の可能性が最も高い“身内”であった。ただし文書中に登場する、他に例をみないほど“国際性”豊かな神々と呪いの言葉のバリエーションは、王位継承の定めを確実なものとするために、周辺世界の神々と呪いの言葉を王が必死になって集めさせたことを示している。覇

権国でありながら周辺諸国に誓約を守らせるためには、自分たちの神々と呪いだけでは不十分と考えたのである。よって、もし「エサルハドン誓約文書」と聖書のあいだに何らかの影響があったのならば、そのベクトルはアッシリアからユダ王国の方へ向いていたのではなく、その逆であった。すなわちユダ王国とその周辺世界の呪いの伝承をアッシリアが取り入れた可能性が高い。

以上のように、〈法的契約〉と思える王位継承の遵守に関する文書が、実際には神々への誓約という〈宗教的契約〉であること、そしてどんな時代と社会にあっても、人間の行為としての「約束」を社会的（法律的）契約と宗教的誓約に完全に二分してとらえることはできず、両者が重なり合う領域にこそ「約束」の本質が存在するのではないかと渡辺先生は結論された。

そのほか、楔形文字による粘土板文書の書かれ方・使われ方・残り方などの基礎知識に始まり、神アッシュルは「アッシュル」という名の土地が神格化して誕生した神であり、その土地と神の勢力拡大により、紀元前2千年紀前半には「都市アッシュル」（都市国家）、その後は「国アッシュル」（「アッシリア」は英訳のAssyriaによる）となって紀元前612年まで続いたこと、「誓い」は本質的に「自己呪詛」であること、粘土板文書の読解作業の困難さと楽しみなどを、実体験に基づく多くのエピソードとスライドを交えながら、とてもわかりやすく説明され、粘土板文書の世界へと聴衆をいざなわれた。

CISMOR特別研究員 中谷直司

## 第2プロジェクト 公開講演会

# 「ムハンマド風刺画事件とデンマークにおける ネガティブな『対話』」

日時：2009年12月5日（土） 13:00～15:00  
会場：同志社大学 尋真館地下1階 Z地下1教室  
講師：ピーター・ヘルヴィク  
（一橋大学大学院社会学研究科 客員教授）



人類学者であるヘルヴィク氏は、綿密な調査にもとづきながら、ムハンマドの風刺画事件について、次のように説明していった。

デンマークは、人口550万人の小さな国で、そのうちムスリムは20万人、とりわけ熱心な信徒は2～3万人だと言われる。そうした社会状況にあって、デンマークの多数派に属する人々は、たとえ公的な場であっても、少数派であるムスリムや少数民族について何を言ってもかまわない、と考えているふしがある。実際、たとえば議会などでも、ムスリムのことをヨーロッパにおける「ガン」であるとか「疫病」であるとする過激な発言がなされてきた。ムハンマドの風刺画事件は、その延長線上に起こった事件であると考えなければならない。

事件の発端をどこに求めるかは、いくつかの見解がある。通常は、2005年の9月に、デンマーク最大の日刊紙「ユランス・ポステン」が風刺画を載せた時点であるとされる。しかし氏は、その発端を1930年代のヴァイマール時代にあると言う。では、なぜそのように考えるのか。

風刺画の掲載は、新聞社が挑発的に仕掛けたものであった。その背景には、現在のデンマークのジャーナリズムが、明らかに政治化している、ということが挙げられる。そうした政治状況の転機は、とりあえずは2001年にあった、と言えるだろう。この年にはまず、ムスリムの若者三人が過激派の支持者として逮捕された。まもなくして9・11テロが起り、その後に実施された国政選挙では、ラディカルな右派政党が勝利した。そして、その政権は、イスラームにたいして文化戦争といえるような政策を展開していく。ユランス・ポステン社も、そうした政府の方針に沿うように、自分たちの敵はこれまで「共産主義」であったが、これからは「イスラーム」である、と言うようになっていったのである。

しばらくすると、イスラーム諸国の政府が、風刺画の掲載にたいして非難の声明を出し、いくつかの地域にあっては民衆の暴動が起こる事態となった。ところが、デンマークの政府は、「言論の自由」があるから新聞社をコントロールすることはできない、と言うだけであった。欧米のメディアや研究者も、この「言論の自由」を守る、という論調をとり、イスラーム世界と歩み寄るようなことはなかったのである。

氏は、こうした欧米の論調の背後には、いわゆる「ネオコン」（氏の表現ではNew Conservatives）のネットワークがあると考えている。その代表的な論者であるサミュエル・ハンチントン、自分でないものを憎んではじめて自分たちを愛することができる、という小説の一部を引用したあとで次のように言った。敵の存在は本質的なものであって、最も危険な敵意が生じるのは、文明間の断層においてである、と。これは、1930年代にナチズムの基盤にもなったカール・シュミットの「友敵理論」にほかならない。こうしたことから氏は、この事件の発端を1930年代のヴァイマル時代にあると言うのである。

また、ネオコンの理論的支柱としては他に、レオ・シュトラウスがいるが、かれらにとって交渉や妥協はありえず、公共圏は「対話の場」ではなく「戦いの場」だ、ということになる。そうしたネオコンの認識に対処することが、今回の事件を、より良い方向へ進めるための糸口であると氏は考えているようである。

ネオコンが政治の表舞台から退き、その実像の解明が進められるようになってきている現在、氏の見解についての思想的な検証がまたれる。

CISMOR特別研究員 藤本龍児

## 第1プロジェクト 公開講演会 「地中海地域の哲学者としてのマイモニデス」

日時：2009年12月19日（土）13:00～15:00  
会場：同志社大学 至誠館2階 S21教室  
講師：サラ・ストルームサ  
（ヘブライ大学 学長/  
アラビア文学・アラビア語学科 教授）



本講演においてサラ・ストルームサ教授は、ユダヤ民族史における最重要人物であり、最も傑出した中世ユダヤ思想家であるモーセ・マイモニデスを取り上げ、総合的な知的活動の一部である彼の哲学を、「地中海文化世界」というコンテクストのなかで詳らかにした。

従来のマイモニデス研究においては、マイモニデスとイスラーム世界との連関はそれほど明瞭に描き出されてきたとは言い難い。マイモニデスの様々な社会的活動はもっぱらユダヤ社会の文脈の中で扱われることが多く、イスラーム世界は背景へと退いている。

また哲学や諸科学の分野に関しては、確かにイスラーム哲学との関連が指摘されてきたものの、彼の哲学が当時のイスラーム哲学全体にどのように統合されているのかという点に関しては、詳細な研究はなされていない。つまり、彼の諸活動は他文化やその発展とは独立して遂行されたかのような印象を与えてしまうことになる。

講演者はこうした事態を避けるために、地中海世界を文化の統合原則と理解し、「単一のユニット」（フェルナン・ブローデル）と捉える包括的なアプローチを採用し、その文化的コンテクストのなかでマイモニデスの諸活動を把握する。その結果として、明らかとなるのは、マイモニデスは地中海というひとつの世界を形成する、複数のサブカルチャーに同時に帰属しており、彼の知的活動の所産にはその文化的多層構造が反映されているということである。また、そうした文化的多層性は単に共時的なものであったばかりでなく、様々な宗教伝統を顧慮した通時的なものでもあった。

彼は各々の文化的伝統が有する多層性を捨象することなく、考古学的に文化的遺産を発掘し、それらと弁証法的に対話を行うことで彼独自の思想を形成したのである。



マイモニデスのこうした思想形成は、当時の地中海世界における政治的背景と少なからず関連している。マイモニデスが1135年にコルドバで生まれた際、その土地を支配していたのはムラビト朝であった。その後、ムワッヒド朝がコルドバを征服し、キリスト教やユダヤ教への迫害が始まると、マイモニデス一家は北アフリカのフェスを経て、十字軍の支配するパレスチナに逃亡する。最終的に、彼らはファーティマ朝の支配するエジプトに移住することになった。この間、マイモニデスは四つのイスラーム政体と、それらを支持するイスラームの法学や哲学の学派に邂逅する機会を持った。こうした危機の生涯を通して、マイモニデスは非常に多彩な文化や政治体制に接触することができたのである。

マイモニデスはアリストテレス主義を自称するが、彼自身が弟子に推奨した注解書からも明らかのように、その解釈はアラビア文化を経由したものである。また、天文学、医学、数学などを哲学の重要な一部と看做したことにも、彼の知的活動の多層性が窺い知れる。このように、マイモニデスは諸文化を統合する地中海世界を象徴する人物だと言える。ただし留意しなければならないのは、そうした文化的統合を達成し得たのは極めて稀な事態であったということである。それを可能としたのは他ならぬマイモニデスのパーソナリティーであり、その点に彼の思想の独自性と偉大さが認められるのである。

CISMORリサーチアシスタント 上原潔

## 第2プロジェクト 公開講演会

### 「アメリカの福音派にいま何が起きているのか？」

#### —水面下で進む大変化について—

日時：2010年1月16日（土） 13:00～15:00  
会場：同志社大学 クラーク記念館2階 礼拝堂  
講師：リチャード・サイジック  
（全米福音派連盟 前副会長）



氏はまず、われわれが今、人間の歴史において決定的な瞬間に立ち会おうとしていると述べ、また、だからこそ新しい時代の到来にそなえて、認識、思考、行動、いずれの次元においても大変革が必要である、と言って講演を始めた。そして自分たち新しい福音派は、親の世代や、またその上の世代の福音派とは異なる、新しいヴィジョンと戦略をもっていると行って、次のように話を進めていった。

なぜ、現在が決定的な瞬間なのか。それは第一に、エネルギーにまつわる歴史的な変革が起きようとしているからである。これからはエネルギーの供給源を、太陽光や風力、地熱といった再生可能なエネルギーに変えていかなければならない。しかし、こうした大変革の時代には、さまざまな所で摩擦が生じるし、歴史上繰り返されてきたように終末論が起こってくる。たとえば、現在アメリカで、『レフト・ビハインド』という小説が史上最高の人気を呼んでいる。シリーズ累計で4000万冊、関係書籍も1700万冊が売れ、作者に入る印税は、毎年1億ドルにのぼるらしい。その小説は、太平洋を横断中の飛行機のなかで、乗り合わせた人々のうち、3分の1が忽然と姿を消す、という場面から始まっている。奇妙に思われるかもしれないが、これは、福音派が「Rapture（擧げ）」と呼んでいるもので、神によって安全な場所に引き上げられ、救われる、という現象をあらわしている。つまり、この小説は、キリスト教の終末論にもとづいて構成されているのである。

このようなエネルギーの変革と終末論のブームのなかで、古い福音派は、いずれキリストが再臨し、自分たちは別の地球に擧げられるから何もしなくてよいのだ、と考えている。それに対して新しい福音派は、自分たちが擧げられるとしても、今の地球にたいして責任があり、この地球をケアし、再生可能なエネルギーへ変革していかなければならない、と考えるのである。

今が決定的な瞬間にあるという二つ目の理由は、「科学と宗教」についての考え方に変化が求められているからである。古い福音派は、科学を、信頼できない危険なものであると考えている。一方、たとえばリチャード・ドーキンスのような科学者は、進化論を信じるためには無神論者でなければならない、と考えている。つまり、科学を全否定する人々と、宗教を全否定する人々が対立しているのである。しかし、それら両極端な考え方のどちらかを選ばなければならない、ということではない。たとえば、ヒトゲノム研究の第一人者であり、オバマ大統領によってアメリカ国立衛生研究所の所長に抜擢されたフランシス・コリンズは、次のように言っている。宗教と科学は対立するものではなく、神の領域はスピリチュアルな世界のものであり、科学の領域は自然な世界のものであり、この二つの世界は、互いを必要としている、と。新しい福音派も、両者を対立するものとは捉えない。ゆえに、気候変動が起こっているというデータなども受け入れて、それへの対処が必要であることを訴えるのである。

三つめの理由は、核兵器にたいする姿勢にかかわっている。これまで福音派は、対ソ連という冷戦構造の最前線で活動してきた。たとえば1983年のレーガン大統領による「悪の帝国」演説などは、福音派との関わりのなかでなされたものである。ゆえに古い福音派は、冷戦構造を前提にした認識や考え方を引きずっており、すでにソ連が解体し、核兵器を持ち続ける根拠が薄れたにもかかわらず、核廃絶の道へ歩みだすことができない。実際、私が核問題について言及すると、古い福音派のリーダーたちからは、そんなことよりも中絶問題のほうが重要である、と釘をさされてしまう。

しかし現在、エネルギー問題や気候変動、核によるテロなど、大きな変革の時代にさしかかっているからには、新しいヴィジョンと戦術が必要であることは間違いない。新しい福音派は、ヴィジョンの中心に「共通善」を据えている。ここでいう共通善とは、基本的には、魂の次元でも身体の次元でも、全ての人にとって善である、ということである。ゆえに、たとえば、自然に存在している資源は全人類の共有財産である、と考えることになる。また、古い福音派は、何かに「対立」するという姿勢をとって活動してきた。逆に、新しい福音派は、多くの人々と「協力」するという姿勢で活動する。

サイジック氏は、各国の人々が、現在のように多くの関心を共有しているということはこれまでなかった、という事実  
に注意を促し、共通善と協力を重視する新しい福音派の意義と可能性を、改めて強調して講演を終えた。

CISMOR特別研究員 藤本龍児

## 第2プロジェクト 公開講演会

### 「トルコ—西欧とイスラーム世界との架け橋としての役割」

日時：2010年1月30日（土） 13:00～15:00  
会場：同志社大学 神学館3階 礼拝堂  
講師：セリム・セルメット・アタジャンル閣下  
（駐日トルコ共和国特命全権大使）

講演者であるアタジャンル閣下はこれまで母国トルコに加え、ヨーロッパや東南アジアで長く公務に携わってきた人物である。氏の報告の中心は、トルコが東洋と西洋、アジアとヨーロッパ、イスラーム世界とキリスト教世界の間に位置し、それらの「文明の衝突」を克服する架け橋となる国であることを述べるものだった。

氏はまず現代世界におけるトルコの位置付けを述べることから始めた。第二次大戦後の冷戦構造は世界を東と西に分けたが、そこで起こる出会いは敵か味方かという政治的イデオロギーに基づいた視点を備えるものであった。1970年代にそうした緊張が緩和し始め、80年代にはベルリンの壁やソ連の崩壊が起こった。しかし90年代になると、「原理主義」や「テロ」と呼ばれる勢力が台頭し、その中で人は「文化」を包み込むより包括的な概念である「文明」に属するものとされた。それは「文明」間の新たな敵視を人々に促すも



のとなってしまう、特に9.11を経て、世界の「イスラーム敵視」が強まったと言える。アメリカのオバマ大統領はトルコのアンカラ、またエジプトのカイロを訪れてそのような認識の是正を訴え、ムスリムがアメリカの敵ではないと述べた。「文明の衝突」が我々に突きつけたものは、人類の歴史が緊張と対立の連続を繰り返し、様々な「文明」の間にあたかも階級があるかのような主張であったと言える。

そうした諸文明の間に位置するのがトルコであり、氏によれば同国はイスラーム国、世俗主義国家、民主主義国家として、文明間の架け橋となることを目指してきた。その基本的な姿勢は「多様性の中の調和」と表されるものであり、それは多くの民族や宗教が共生していた前身のオスマン帝国から引き継がれたものである。現在のトルコ建国の父であるアタテュルクは「文明」を一つの海、「文化」をそこに注ぎ込む河川の一つと考えていた。そうした理念の実現の一つが2005年に始まった「文明の同盟」の提唱であり、牽引者であるトルコのエルドゥアン首相とスペインのサパテロ首相はそれぞれがイスラームとキリスト教を代表する立場として会合を重ねてきた。「同盟」はイスタンブールやニューヨークなどで定期的に会議を催し、その活動は国連事務総長からも支持を受けるほどに評価された。「同盟」の基本理念は文化的な排他主義を拒否し、人間の尊厳を世界の価値観の最上位に位置付けることにあり、国家間協力に限らず、様々な国際機関、市民社会のネットワークの構築を目指している。

その他、トルコは国家固有の外交政策においても建国以来の「国内外の平和」を旗印に、アジア、東欧、西欧における紛争調停や文化交流に努めてきたという。氏はその中心にあるのがグローバル化した世界の一国としての人道主義に基づいた外交だとした。かつて日本が東洋と西洋の架け橋を目指したことを知った上で、氏は最後に「トルコにおける日本年」である2010年、学術交流を始めとした多様な交流がトルコと日本の間で起こることが期待できると述べて、講演を締めくくった。

CISMORリサーチアシスタント 高尾賢一郎

## ◆ 一神教学際研究センター関連書籍 ◆

—2010年3月発行の最新号—

ご希望の方は一神教学際研究センターまでお問い合わせ下さい。



『JISMOR vol.5』



『一神教世界 第1号』

—書店にて好評発売中—



『アメリカの公共宗教』（NTT出版）  
藤本 龍児（一神教学際研究センター特別研究員）[著]

## ◆ 2009年度後半活動報告 ◆

2009年10月17日 (土)

日本オリエント学会共催 公開講演会  
「古代近東の契約・誓約・条約」  
講師：渡辺 和子  
(東洋英和女学院大学 人間科学部 教授)  
会場：同志社大学 至誠館2階 S21教室

2009年12月5日 (土)

第2プロジェクト 公開講演会  
「ムハンマド風刺画事件とデンマークにおける  
ネガティブな『対話』」  
講師：ピーター・ヘルヴィク  
(一橋大学大学院 社会学研究科 客員教授)  
会場：同志社大学 尋真館地下1階 Z地下1教室

第2プロジェクト 第3回研究会

「ムハンマド風刺画事件とデンマークにおける  
ネガティブな『対話』」  
発表者：ピーター・ヘルヴィク  
(一橋大学大学院 社会学研究科 客員教授)  
コメンター：内藤 正典  
(一橋大学大学院 社会学研究科 教授)  
菊池 恵介  
(東京経済大学 非常勤講師)  
会場：同志社大学 溪水館1階 会議室

2009年12月19日 (土)

第1プロジェクト 公開講演会  
「地中海地域の哲学者としてのマイモニデス」  
講師：サラ・ストルムサ  
(ヘブライ大学 学長/  
アラビア文学・アラビア語学科 教授)  
会場：同志社大学 至誠館2階 S21教室

第1プロジェクト 第4回研究会

「アンダルシアとスファラディー」  
イスラーム・スペインにおける図書館と学者たち」  
発表者：サラ・ストルムサ  
(ヘブライ大学 学長/  
アラビア文学・アラビア語学科 教授)  
コメンター：三浦 伸夫  
(神戸大学大学院 国際文化学研究所 教授)  
会場：同志社大学 至誠館2階 S23教室

2010年1月16日 (土)

第2プロジェクト 公開講演会  
「アメリカの福音派にいま何が起きているのか？  
—水面下で進む大変化について」  
講師：リチャード・サイジック  
(全米福音派連盟 前副会長)  
会場：同志社大学 クラーク記念館2階 礼拝堂

第2プロジェクト 第4回研究会

「アメリカの福音派にいま何が起きているのか？  
—水面下で進む大変化について」  
発表者：リチャード・サイジック  
(全米福音派連盟 前副会長)  
コメンター：山本 貴裕  
(広島経済大学 教養教育部 教授)  
会場：同志社大学 クラーク記念館2階 CL25教室

2010年1月30日 (土)

第2プロジェクト 公開講演会  
「トルコ  
—西欧とイスラーム世界との架け橋としての役割」  
講師：セリム・セルメット・アタジャンル閣下  
(駐日トルコ共和国特命全権大使)  
会場：同志社大学 神学館3階 礼拝堂

2010年2月27日 (土)

日本オリエント学会共催 公開講演会  
「イスラーム世界の音文化としての  
コーラン (クルアーン) —言語人類学的考察」  
講師：西尾 哲夫  
(国立民族学博物館 教授)  
会場：同志社大学 クラーク記念館2階 礼拝堂

2010年3月6日 (土)

第2プロジェクト 公開講演会  
「トルコにおける宗教間の共生—その課題と展望」  
ドキュメンタリー・フィルム  
『一神教の故郷、トルコの今をみつめて』上映  
講師：内藤 正典  
(一橋大学大学院 社会学研究科 教授)  
会場：同志社大学 弘風館2階 K25教室

2010年3月13日 (土)

第1プロジェクト 公開講演会  
「7世紀のイスラーム到来期におけるコプト教会の動向  
—現代の視点より」  
講師：村山 盛忠  
(日本キリスト教団 牧師)  
コメンター：津田 一夫  
(日本キリスト教団 牧師)  
会場：同志社大学 神学館3階 礼拝堂

第1プロジェクト 第5回研究会

「7世紀のイスラーム到来期におけるコプト教会の動向  
—現代の視点より」  
発表者：村山 盛忠  
(日本キリスト教団 牧師)  
会場：同志社大学 扶桑館1階 F102教室



## ◆ 来訪者記録 ◆

| 年月日        | 氏名                                       | 所属機関・役職                              | 国名    |
|------------|--|--------------------------------------|-------|
| 2010/1/30  | His Excellency Mr. Selim Sermet Atacanli | 駐日トルコ共和国特命全権大使                       | トルコ   |
|            | Bogac Ulker                              | 大使顧問                                 | トルコ   |
| 2010/1/25  | De-min Tao                               | 関西大学 文化交渉学教育研究拠点 拠点リーダー<br>文学研究科担当教授 | 中国    |
|            | Edward Yi Hua Xu                         | 復旦大学 アメリカ研究センター 教授                   | 中国    |
|            | Liu Jiafeng                              | 華中師範大学 中国近代史研究所 教授                   | 中国    |
| 2010/1/16  | Richard Cizik                            | 全米福音派連盟 前副会長                         | アメリカ  |
| 2009/12/19 | Sarah Stroumsa                           | ヘブライ大学 学長 / アラビア文学・アラビア語学科<br>教授     | イスラエル |
|            | Guy G. Stroumsa                          | ヘブライ大学 比較宗教学科 教授                     | イスラエル |
|            | 三浦 伸夫                                    | 神戸大学大学院 国際文化学研究所 教授                  | 日本    |
| 2009/10/17 | 渡辺 和子                                    | 東洋英和女学院大学 人間科学部 教授                   | 日本    |

## ◆ お知らせ ◆

同志社大学一神教学際研究センターでは、森孝一センター長の退任により、下記のとおりセンター長が交代いたしますので、お知らせ致します。

記

|                 |                           |
|-----------------|---------------------------|
| 平成22年4月1日～7月31日 | 富田 健次 (同志社大学 神学部神学研究科 教授) |
| 平成22年8月1日～      | 小原 克博 (同志社大学 神学部神学研究科 教授) |

発行 同志社大学 一神教学際研究センター (CISMOR)  
 〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入  
 TEL 075-251-3972 FAX 075-251-3092  
 E-mail: info@cismor.jp  
 http://www.cismor.jp  
 編集 CISMOR事務局編集部 執筆協力 高田 太  
 印刷 中西印刷株式会社